

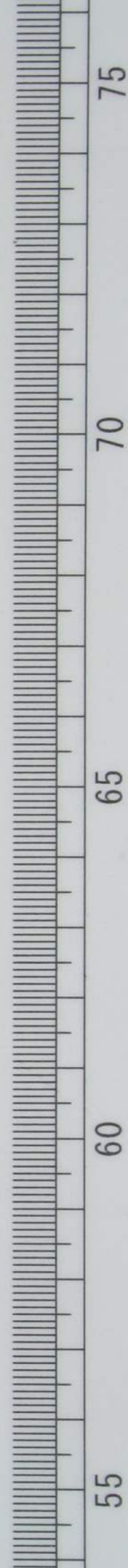
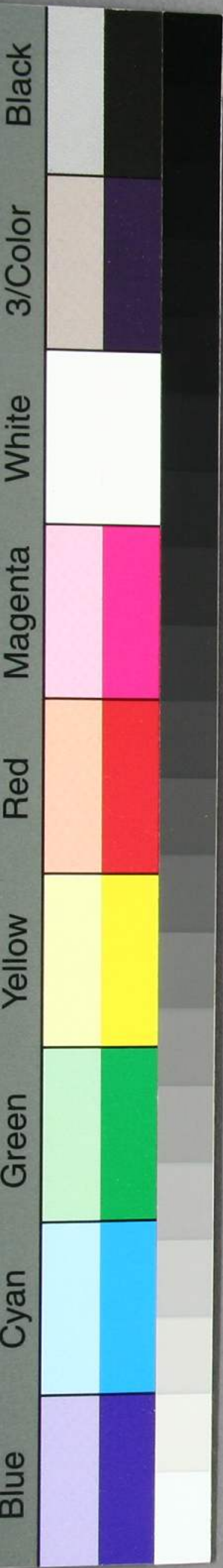
迷巡詩  
へ禮集  
るの

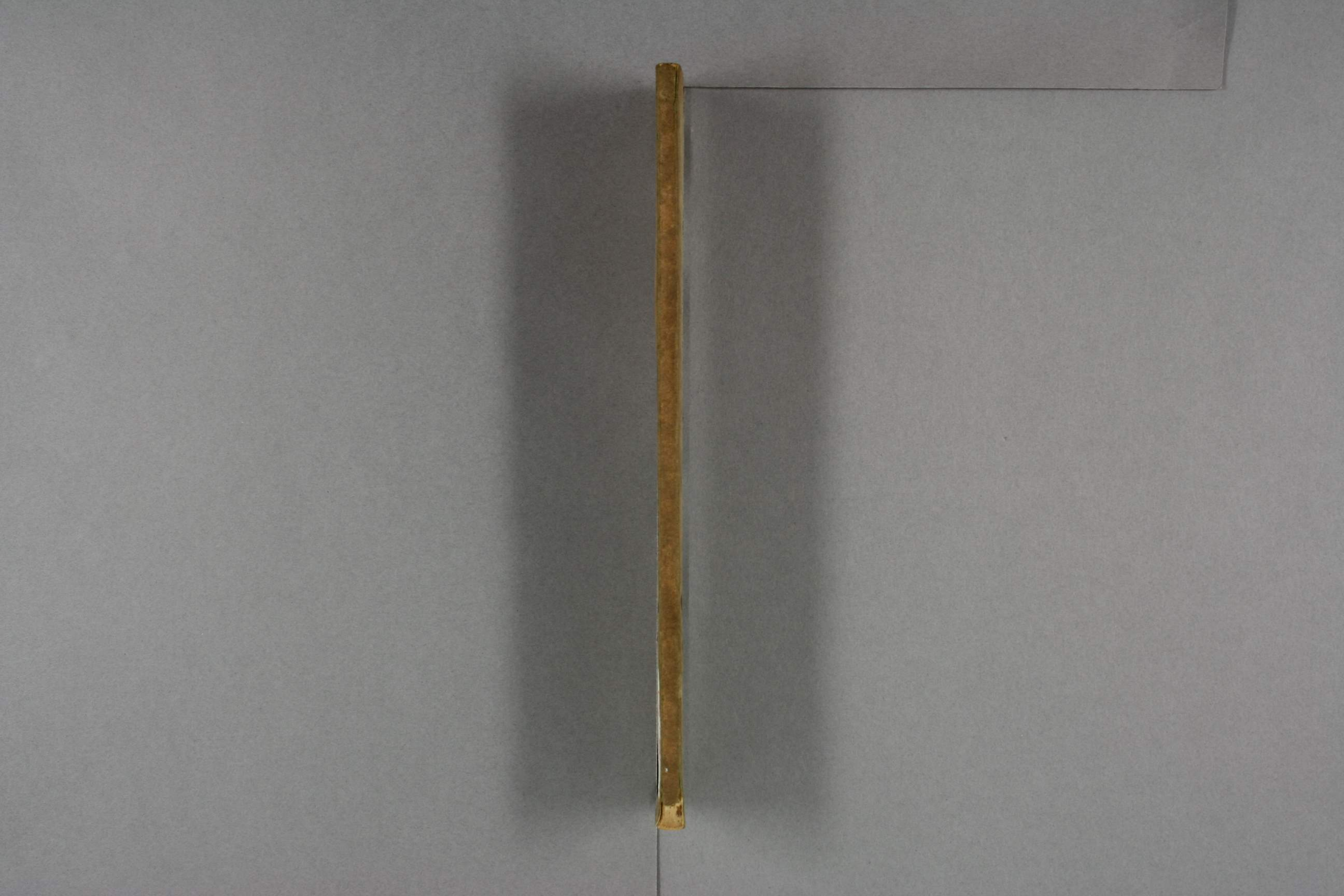
● ● ●  
村夏越細

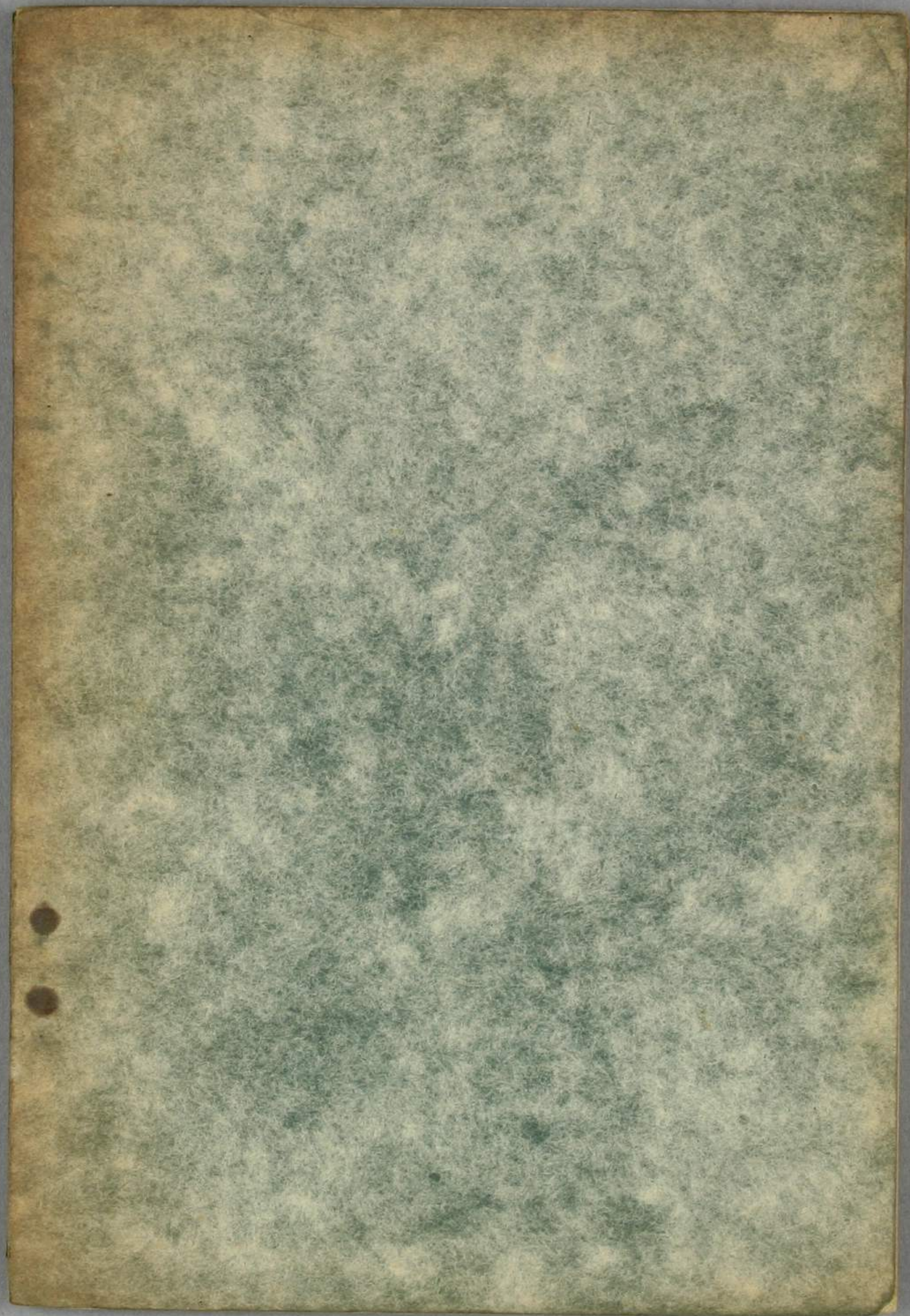
本間文庫

文庫 14

D 220







文庫14  
D220

### 目次索引

無限の捕握	一
魔群	四
黒毛んだ赤味	五
罪と悪となくば	七
微温き十一月の宵	一〇
我と日と	二
午前十時	三
毛皮の衣着たる少女よ	五
晩秋よ	七
空白	九
我が影よ濃くあれ	二



みの踵よ！……………二三  
 秋の日よ……………二四  
 解かれざる謎……………二六  
 あゝ獨り行く……………二六  
 あゝ人間よ……………二九  
 我がたましひは……………三二  
 生と美と……………三三  
 物欲よ……………三五  
 此の深き謎……………三七  
 此等の自然兒を……………三九  
 午後……………四三  
 此の幸福……………四四  
 人生の終り頃……………四四



あゝ日の光よ晴れたる朝よ……………四九  
 二者の其の一を……………五三  
 雪と月と十字架と……………五五  
 『チアニ』……………五七  
 十二月はじめ……………五九  
 唯かゝる時……………六二  
 我等死したる後？……………六三  
 廢れたる神の耕地……………六四  
 山の町……………六六  
 我が思ほひと水車とぞ……………六八  
 白雲の動かぬ真晝……………七一  
 かゝる刹那も……………七二  
 栗の木蔭……………七四



春の姿は閃めきて	七六
みんな日	七八
『時』は路傍に睡り	八〇
北國の町	八二
雪の國	八四
白く明るき晝よ	八六
まどろめる晝の野口	八七
あゝ星よ	八九
虫よ	九一
いづみど?	九三
露の丘	九四
亞鉛の塀	九六
收穫の板倉わたり	九七

垂氷の格子	一〇〇
鐵色の會社の前	一〇二
此の心臓を贈らん	一〇三
日光と青葉と	一〇六
『若さ』よそ帝王なれ	一〇八
太陽の如く	一〇九
『時』の姿	一一一
斜丘のひとゝき	一一三
月は佇みて	一一五
ボヘミアの草野	一二六
錆色の鳶	一二八
秋晴れ	一二九
林の丘の黄昏	一三〇

詩 六 十  
四 章



錯綜と紛亂！……………二四



迷へる巡禮の詩集

細越 夏村

無限の捕握

何故「日」と云ふものが有る？

「時」よ、背を向けよ、永久に、——闇の背を！

俺は、もう、汝の透明な顔には飽きて仕舞た。



人間よ、皆な、裏を反せ、——『死』と云ふ暗  
い静黙の裏を、

微動だも爲ない裏を！

而て、傲慢な、我儘な『時』の

——虐げる民衆を失ひ果てた暴王のやうに

——唯獨り残つて、呆れ茫する狀を遠くか

ら見てやろうでは無いか！

眞に怪絶にして邈大無窮なる不可敗の夫の

掌よ！

あゝ、あゝ、『自然』でさへも

其の不思議なる無限の捕握の外に在り得な

いとは！

## 魔 群

十字架の腕窩！

血に渴した鎗の穂尖の稻妻が閃めく。

——それが見えないか？

今、彼方の町角を

胡栗並木の夕暮の川端へと

フランスの尼の群れが曲つて行く。  
魔群！

平氣で、膝のあたりに錫銅の十字架をカチ  
ヤづかせて。

白い袋頭巾、

黒い装袴、

腰に繫いだ金鎖、——歩む度毎廻りまわる其  
の蛇！

白ざれた睫毛の巫女ども。

碧いかすみのかゝつた深い眼で、

不思議の遠くを見つめながら、

アレ、今、橋を渡つて行く。

——白臭味と、青黒い腥臭味とを背後に漂  
はせて。

### 黒ずんだ赤味

強烈な毒の香を吐く蝦茶色の葎

——花片も無く。

ウカ／＼と何か思ふ度毎、

その葦が眼の前にちらつく。

紫蘇色の蔦に埋もれた煉瓦の深い窓、

——埃だらけのガラス板が毀れて。

ウカ〜と心の迷ひ行く度毎、

赤黒い其のカアテンが眼の前にちらつく。

砂原の夕闇に一基立つた十字架を

這ふて凝び付いた古い血の跡。

キリストを思ひもせぬが、

人間が腕を擴げたやうな忌まはしい形！

恨み長い古血の色！

黒ぞんだ赤味！——世のあらゆる。

壊敗した肉のシンボル！

あゝ、胸がムカづく。

## 罪と悪こなくば

午前二時の町に立ちて、

仰げば、月の面に

鐵路の影も見ゆ。

教會堂の塔の鐘は

星と接吻くちつけ、

密ひそやか其の語らひも聴き綴つづらる。

あゝ、透明の花片は

幾層に空を蔽へり。

無数なる其の小舟よ、

その上に、亡き人々の靈は浮べり。

されど、眼の縁を溢るゝもの

——涙よ、汝は地を慕ひて頬を傳ふ。

また、足よ、汝は塵埃の戀人なり。

あゝ、我れに、穢けがれも、

笑ひ能ふ巢有り。

我等は闇に羽はたく梟かぶなり。

罪と悪と無くば

我等が側に咲く可き花も無し。

その花の凋むまで、

わが心よ、酔ひて在れ。

微温き十一月の宵

あはれ、今、よの露廊に溢れ崩るゝ花叢も  
無し。

微温き十一月の宵、

淡白き月の光りは、

這ひ浮び淀める霧を透して、

軟らかに、いとも静けく、二人の胸に滲め  
り。

湿やかなの沈黙よ、

—— 夜も、君も、また我れも。

唯、おにどなく、密に似る心の溶けて、

甘き涙、頬を傳ふ。

あはれ、今、よの露廊に溢れ崩るゝ花叢も  
無し。

人間のよゝろ、花よりも美しき時有り。

我等かく夢みる時！

たましひの融けて合ふ時！

しめやかなの沈黙よ、

人間の若さ、春よりもそゝなる時有り。

あはれ、よの情緒、膏油の如く薫り漂ひ、

酒の香の灰に刺そおと、天地に擴ちり滲め  
り。

### 我れと日と

「自然」は凡て我が爲に在る如き日あり。

「自然」は凡て我れを攻むる如き日あり、

— くれらの日、我れ、最も歡ぶ。

萬象は凡て我れと相伍せる如き日あり。

— かくる日は、我が心常に悶也。

我れも無く天地も無き如き日あり。

— かくる日に、「美」ぞ凡てある。

### 午前十時

あの空の色は

我れ一夜夢みし獨逸の河の畔り、

つや、かの緑濃き葉を

高く蔽ひしそれに似たり。

今、暖き眠りより醒め、  
ガラス戸を透して仰ぐ初冬の空、  
獅子に似る雲群れて飛び、  
太陽は——貴人の賤民に臨める如く——  
おろそかに、懶慢き眼もて  
我が地をば見おろそ如し。

その如き心地に我れも  
薫はしきシガアの煙嗅ぎつゝ、  
世界と人類と自然との凡てを越えて、  
倦み疲れ、嘲み思へり。

僕無き帝王、

今、獨り、宇宙の外にさまよひ、  
富み足らふ心緩悠く、  
虚々として「死」を挑みつゝ、  
さかしげに、折から響く午前十時に  
唇は嗤ひて在りぬ。

毛皮の衣着たる少女よ

疎らなるセピア色の葉、  
黒き幹、黒き枝、  
その間にクリーム色の空。

スコットランドよ！

その僻村の、毛皮の衣着たる少女よ！  
栗の實を拾ひし籃を片肘に掛けたる姿よ！  
また、かの幅廣き粗布の前垂よ！

深秋の曇れる早晨、

その美しさよ、我が視覚は驚き顫ひ、  
俄然として、醒めたる如く、我が心いとも

激しく、かの國の少女を思ふ。

世界よ、人類よ、我れ頼に懐かし。

—— あゝ、あゝは純白の倉庫の壁のほそり  
—— 神よ、何故に海を造りし？  
かの國と此國と、あゝ、何故に斯くも遙か  
なりや！？

## 晩秋よ



黛赭色の栗の林に、  
また、紅褐色の櫻の枯葉に、  
朝の薄日微にかよひ、  
いと淡き水色の空は  
寂しき傲りもて深く黙せり。

老いし「自然」の静かなる美しさ見よ。  
我等おのづから足は止まり、うなだれて、  
それと無き冥想の遠方を辿る。

やがて、幽香の情緒に充ちし胸重く、  
我れならせ傍への幹に凭りぬれば、

距たりし世に啼く如き小鳥の歌は白日の  
夢を誘ひ、

遠き昔の人の香淡く立ち迷ひて、  
過ぎ來し方の變遷に涙は何時か眼にし在れ。

あゝ、若き日の哀愁！  
晩秋よ、汝は唯静かに  
人間の側を仄白う滑り行く。

空  
白

・奥山のそのかげの野を

いとも静かに忍び行く夕闇の影を思へ。  
その如く、いとも寂しく我が心ひとり彷徨  
ふ。

あゝ、宇宙——無限の「時」と「ひろがり」。  
何者ぞ、ふの空漠の一点——地の球を  
青と赤とに飾る！

人間よ、眼を放ち、心を解きて、  
薄黒さかの空白を見よ。  
そみに、汝等、生を失ひ、また、死を失

はん。

### 我が影よ濃くあれ

黄となりし葉皆なうなだれ、  
霜とくる朝は黙せり。

いばら野の廣き遠近、  
秋草の花衰へて、  
火葬場の丘のかなたに

地平線、愁へて這へり。

あゝ、鳥よ、汝も亦た幸ならせ。  
巢を後に、群れを離れて、  
かゝる日を、いづみへ、  
唯ひとり悲しうも飛ぶ。

「生」の寂しみ！

いとせめて、我が影よ、濃くあれ。  
ふり返り、ふり返り見て、  
ただ、昨日に恍如たらし。

この踵よ！

ふと、浮び閃めきし  
花やかか、いにし一日。  
——まぼろしよ、いづみに。  
寂寥を胸を迷ふ。

あはれ、あの踵よ！

「過去」てふ潮に追はれて、  
「生」の地は其の跡にし

刻々と失せみそ沈め。

その海よ、

常<sup>とこ</sup>伸<sup>の</sup>び<sup>は</sup>駛<sup>し</sup>り、

「記憶」てふ舟を何處へ、

幾そたび呑みも果てけん。

## 秋の日よ

はた、と、

又、はた、と、

折ふしを、ドロの木、ものに目ざめて、

うそ黒き夕の氣ざしに、

しげり葉を揉みみそ惱め。

はた、と、

その音、とだえて、

江のかなた、

鑿<sup>の</sup>の音、灰に漂ひ、

木の間に——心の如く——

小さき火の、かつ瞬ける。

はたゞ、と、又、ドロの音、  
そゞろにも時雨れぞ初むる。  
秋の日よ、あな、  
愁はひの深きかな。

### 解かれざる謎

みとゞ、と、  
永久に寂しう歌ひ咽びつゝ、  
獨りし行くか、葉がくれて、

小坂の堰のさゞれ水。

道みそ盡きね、「時」も亦た、  
あゝ、とみしへの漂浪に、  
家なき水よ！  
悲しからせや、汝に似る  
運命の雲は、空高み、  
汝どしも何時か逢ふべき。

茲に解かれざる謎あり。  
わが人よ——その如く——君と我れと、  
相見送りつ、いや遠り行く。

あゝ、獨り行く

色なき日、風におのゝき、  
ものかげに、虫低う泣く。  
たけ高き莖細う立ち、  
紫の花さびしう咲けり。  
かゝる日を、山谷越えて、  
我がおもひ、あゝ、ひとり行く。

あゝ、人間よ

あはれ、かの遙けき嶺の  
其のかげにしも里の有りなん。  
かゝる夕べ、  
あゝ、何なれば、  
人間てふものゝ  
生きざる可からざりや。

あはれ、みの遠行く川の

其の下にしも町の有りなん。

かゝる夕べ、

あゝ、何なれば、

人間てふものゝ

死せざる可からざりや。

かゝる時、いや思はるれ

—— 神てふものゝ

いづくにか在る。

山も河も

天も地も

悲みぞ凡てある。

あゝ、人間よ、

生まれし汝きれの

いたましきかな。

### 我がたましひは

かの嶺の寂しき松よ、

幹長く唯ひとそしに、

振りもなく、ひともと立てる。

工場の屋根越えて、

電線の柱の右に

はるく、いと小さく、

汝が姿眺むる毎に

哀愁ぞ胸にひろおる。

あはれ、夜半、月冴えて、

青黒き光りの海に

天地の漂ふ時し

眞白かる星影遠く

汝が枝の端にみそ宿れ。

しかる時、我がたましひは

かの嶺の松のほとりを

うらぶれて、さまよひながら

振り返り、いと遙かに

みの町を、みれらの人を、

涙ぐみ、只管に見おろし、

あゝ、いと悲しう、

しほたれて、瘖せみそまされ。

生と美と



雨の音よ、

ばた、と屋根の柱打つ雨の音よ。

緩く早く、汝が思ふまに、

重く軽く、屋根打つ雨の音よ。

自由の調よ。

汝が思ふまに、

はたと絶え、ふと又起る雨の音よ。

その無羈束の、あゝ、いかに美しきかな。

幼き日！

いづみよりか、見えぬ煙の潮そらに湧

き返り、

——あゝ、われら人間とても亦た

唯まゝにして美しかりし日のさまの

他界の夢の影のおと、

そらに胸に浮びぬれ。

人間よ、なごて、

汝が進み行く「生」と「美」と

いや遠ざかり、歳おとを、相互々々に背馳

するや。

物欲よ

落陽の光り華やぎ、  
紅葉せる丘の林は  
古羅馬の榮華に飽きて死を思へりし廷臣の  
饗宴のおど耀ける。

白鳩のきらめき軽く、典雅にも、  
ふど、林より、夕照の光りの薄紗曳き纏ひ  
かの煉扉を、瓦家の軒へと、今し、  
うらゝかの都會の秋は夕ぐれて、

「物欲」！胸の濱打ち、満潮の、あな、只管<sup>ひた</sup>  
にみそ寄せ來ぬれ。

此の深き謎

夕月の光り、知られせ、忍びやかに、  
いつしか、地の面、いと薄く流るゝ黄昏の  
頃、柴垣つゞく小路のそらゝに、  
桐の實の枝、さては、豆柿の影おもしろく  
黒々と、

薄墨色の夕靄にみそ浮びぬれ。

馬鈴の遠をちに消え行く方を慕ひ、

煤塗りの板橋の根に佇めば、

川原の風に音もかく戦く茅荳ちがゆ、また、杉の

細並木、

土色の水落ちて、流るゝさまも無く、

重なり繞る遠近をちみちの四方よもの枯山黙々と老翁おきなちの

群れの眠る如く。

ふと、——駱駝の毛もて造れる外套と、

絹もて織りし襟巻とを我れに思ひ、

……此の深き謎……

それとなく、ものに敗れし心地して、

むらがる闇へ、追はれし如く歩み出でに  
し。

### 此等の自然兒を！

白雪に埋もれ果てた小さい町の涯はそに

低く懸れる、霞める三日月よ！

あゝ、かゝる静謐の夜半、  
あの深い雪の中に  
熟睡うまゐるに通ふ生暖なまぬかかい呼吸の  
彼方此方に微動する事實は  
いかに驚く可き奇怪なるぞや。

かゝる嚴肅の夜よるの中に、  
みだらな、或あるは賤しき、  
はしたなき、また、淺間しい夢の、  
まゐと、流れ漂ふとは！

あゝ、我が心は青い炎焰はむらを捲いて、

激切に、人類の存在を咀ふ。

思へ、朦朧のかの遠山の  
森深き谷間の岩洞いばらを。

そゝに、猛獸や毒蛇や、  
血に足らひ、生肉に飽きて、  
膨れたる苦しき腹を横へ、  
夢も無く、慾望も無く、  
昏睡さびしてる状を。

其等ゐそは、まだしも、

此の幽深龍大なる自然に適ふはしいものでは

無いか。

神よ、あゝ、若しも此の宇宙に  
所詮人間てふ芥子粒を撒き散らさねばから  
ぬならば、

我は推薦を——腕力と汗と垢との人

——所謂粗鈍なる蒙群

——百姓よ、労働者よ、而て、其の協力の  
嚮導者よ！

願はくば、顧みたまへ、此等の自然兒を！  
神よ、あゝ、労働せざる者の

白晝の夢と、夜半の夢とは、  
いかに、いとも阻ふ可きかな！

## 午 後

ピチ、ピチ、と、凍つた雪の上に細かい雨が降  
る。

枝のみごみ、切り落されて坊主になつた柳  
の黒く枯れた太い幹が曲りくねつて。  
橋の落ちた跡の川原。

とみろく、薄墨を流した灰色の低い空。  
町裏の空地はふて、睡つて居る。

——私の心は呻めく。

## この幸福

淡碧の空から颯風が渦捲き落ちて、  
日光に輝く銀白の雪の野を轟々と荒れまわ  
る日。

みの日ほど、私は自分の  
男と生まれ来て、詩人とし生きる此の幸福  
をそみ心から感じた事が無い。

あゝ、我が仰ぐ神は

「力」てふ猛者である。

「力」みそは我が生命で、

「力」みそは我が詩の源泉で有らねばならぬ。

みの日ほど、私は自分を心強く思ふた事は  
無い。

今、私は世に誰をも恐れぬ。

よしや、唯明日と云ふ最<sup>い</sup>とはかない、未來だ  
に無くとも。

私は今日、否、みの瞬間でも、  
心から微笑<sup>ほくそ</sup>んで死ぬ事が出来る。

## 人生の終り頃

掻き分けた灰の底に

一點赤く瞬く炭火。

——其のやうな人、

彼は三十八九歳。

掻き分けた底の底まで、

薄黒く冷え果てた灰。

——そのやうな人、

彼は五十二三歳。

前者は、その灰にでも、

まだ幾らかの温<sup>ぬく</sup>みが残<sup>のこ</sup>り、

その色も新しくて白い。

あゝ後<sup>のち</sup>者よ、

凡てなる其の灰は  
うそ穢くて、ジメ、と湿めり、且つ微び  
て居る。

坂を越え、墓へと向ふ老人の  
笑止なる夫の誇りよ！

——今は早や、他國のやうな、  
背後うしろに長く、消えかゝる領地、  
それを以て何を青年に誇らうとそる？

惨めにもむさくろしい

人生の終り頃！

老人よ、己が墓を

置く可き其のほそりを

汚さじとみそ、思ひ、力めよ。

あゝ、日の光よ、晴れたる朝よ、

雪の面からは水蒸氣が白々と立ち、

堤には青と黄の笹が濡れた簇葉むらばに日の光を

燃やそ。

影と光との街には



青味が、つた靄が漂ひ、  
軒端には雀の群れが勇しく歌ふ。

よしや、世に、友なくも、酒なくも、  
また、花なくも、樂なくも、

謝そ、自然よ、汝が軽く笑む時、

我れに此の淡き歡樂あり。

悩む心のや、しばし、

安らかに憩ひ得る此の「寢所」あり。

あゝ、日の光よ、晴れたる朝よ、

よしや、地球は凡て砂漠であらうとも、

水色の大いある空と、汝の圓き光体と有  
らば我れは風ぎたる海の如き心に乗りて、  
その導かん所へ、唯々として、從ひ得る  
であらう。

我が唯一の神は日輪である。

一日の照臨に疲れて、君の惱ましげに、西  
の涯へと落ち行く時、

我が心も亦た力盡き、悪魔の捕虜となつて、  
その刑場に悪血の醜骸と化す。

眠りも夢も凡て我が殘虐の刑吏である。

わが靈魂は魔王の操縦に任し、  
我が肉体は魔業の器具となる。

あゝ、神よ、——我が「正しさ」と「浄さ」この  
唯一の源泉たる日輪よ。

我れ死して、寺域の雑叢に養料と化り果て  
ん日も、

願はくば、朝の一時、我が墓石に、光の裾  
の一點をだに曳き給へ。

否、されど、我れに子あらば、汝よ、

我れ死したらん後、

我が骨を、汝が住む家の屋根の嶺に横へ  
よ。

その骨の塵と化るまで、

朝なく、東より最初の光り浴びる可く。

## 二者の其一を！

何者か常に愁ふ可き。

冷嘲よ！愁ひ多き者は其れに休め。

見よ、北國の長き冬の空にも、

今朝、冷やかに、驕りと嘲みとの雲は淀めり。

男子よ、弱き涙を飼ふ勿れ。

まゐと耐え難き愁あらば、

自己を高くして、凡てを見おろせよ。

まゐとに深き愁ある心は、

そが故に、いとも大いからせや。

男子よ、太陽の如く、明るさと榮えこの極  
みたらせんば、

月の如く、寂しさと冷やかさとの極みたれ。

男子よ、汝が心の國は、

赤道よ！然らせば、北極よ！

また、ヒマラヤの巔！然らせばタスカロ  
ラの底にみそ！

アレキサンダアとダイオゼニスと！

あゝ、好漢二箇。

男子等よ、選べ、二者のその一を！

## 雪と月と十字架と

雪道に流るゝ月の光りの静けさよ。  
枝細き常盤木の蔽へる蔭の中に、  
木製の十字架は立ちつゝ眠る。

微温き靄白うさまよひ、  
わが胸は静に啼嘘る。

雪の上に漂ふ月の光りの静けさよ。  
幹細き常盤木の影這ふ中に  
一基の十字架は安けく眠る。

「ナ ア ニ」!

小襖の落書、

からかみの表面と共に摺れ消えた鉛筆の跡。  
また、床の柱に

鍍金したビーオービーを貼つた形。  
十年も前、産毛の顔の俺が慰みの古蹟。

あゝ、小襖の落書と、柱の上の紙の跡。  
過ぎた昔も、葬られたる我が幾歳も  
はた、來可き幾年月も、

此の俺に何の感慨も誘はぬ。  
唯、何となく、おもしろく無い。

けれど、「おもしろく無い」と、此の氣持を  
自己に説き明かす度毎、

ごみからか、憤激と反抗とが湧いて来る。

「楽しんで見せる、歡んでやるぞ」と、斯う、

何者か、胸の底で怒鳴る。

而て、自己全体が憤然になつて、

あらゆるものを目にかけて、「ナアニ」と云ふ。

その「ナアニ」よ！

此の一言で俺は此年も生きて來た。

## 十二月はじめ

球状の大いなるキャラの木、

灰色の影落をほどり、

雪溶けし泥濘の小徑に、

晝の日は、きらゝに流れ、

あゝ、いとも残酷に刻まれし足駄の齒の跡  
よ。

雲多き空の青みに  
杉の端黒く刺し入り、  
ほの光る雪の廣場に  
薔薇の蕾紅く結べり。

遠く見る枯れ柴の破れし垣の外を  
顔包み、懷手して、ノサクサと、疲れし人  
の姿よ。

十二月はじめ。

——あゝ、人間の生のみは惨めなるかな。

## 唯、かゝる時

みの心、窪みに溜れる水の如く、  
色もあく、波なく、唯に休らへる時、

我れも得て學者たるに適す。

——みの心眠りて、脈搏と感じとを失へる  
時。

唯かゝる時。

その日、太陽はニツケルの盤の如く、

雲は大いなる湯氣にて、  
鳥は、たゞ、節調器に、  
我れは夫の土偶に似たり。

### 我等死したる後！？

かの夕べ、  
沼の堤に、  
さいかちの幹を距て、  
唯ひと目、

——かの眉黒き顔よ。

五とせは過ぎたり。  
今宵、彼れ、いづみ。  
何を思へる。

かの眉の白うなる時、  
いづみにか相見て、  
その名知り、  
ほゝるみも合ふ可きか？

あゝ我等死したる後！

行き失せし同胞よ。

あゝ、我等死したる後？

### 廢れたる神の耕地

かの岸の堤の上に

枳殼かきの垣かきの破れて、

鐘かねの無き鐘樓かねむらぞ立てる。

あゝ、雲よ、などて寂しく、

夕おとを、かの屋根掠め、  
されど、西へと急ぐ。

灰色の小石川原に

さいかちの並木は枯れて、

夕煙低く漂ふ。

大いある墓域なるかな、——大地！

都市町村は、なべて、寺なり。

あゝ、破戒の僧尼——人類の、

腐れたる魚腸ぎんちやうに湧ける

虫のおと、充ちにけるかな。



かの岸の堤の上に  
人をさそ刺垣破れて、  
警醒の鐘、いづみに失せし。

あゝ、聖地！

秋風よ、輓歌を呻け。

廢れたる神の耕地の荒類の跡に嘆け。

## 山の町

山の町たそがれて、  
橋の根の居酒屋に  
追分の節ぞ漂ふ。

崖端の榎の大本に  
繫がれし馬はまどろみ、  
水際に星は浮べり。

家並蔽ふ裏木立より  
宵闇は、むらがり流れ、  
一條の町は消え行く。

我が思ほひと水車とぞ

落葉の音絶えて、

とすれば、星の假睡みかゝる深き夜を、

石ぞゝり立つ、雑木むら蔽ふ丘の裾のべに、  
頰れ傾く古小屋の水車を獨り呻き續く。

あゝ、幾そ度、重きその音に、結びもあへぬ夢破れて、

青白う瘠せし面わの月低く、

その朽ち落ちし軒の上に、沈みもがてに、  
たもたへる仄薄暗き影を眺めし。

やがて、我れしも昔の人となりて、

水車も小屋も、小流れの遠水下の塵ひちや、  
さては藻屑と化り果てん時、

その後の世も、かの黒き木立は、まゝに、  
月影も、

丘の麓に唯一つ小さう或は立ち残るらん我  
が奥津城に

淡白う置く薄霜の面を照らさめ。

あな、「時」の魔は、まのあたり、  
只管に疾走り駆けよがりて、  
「死」てふ淵へど、我が首を繞りぞ括る奇繩  
を強いも曳き行く。  
世は、なべて、明日を忘れし濃き夢に  
相暖う沈み憩へる今をしも、  
我がおもほひと水車とぞ、いと惱まじう呻  
き續く。

### 白雲の動かぬ真晝

柿の實の黄に色づきて、  
白雲の動かぬ真晝、  
人行かぬや、廣路の  
乾びたる埃見つめて、  
故も無く、我が心悶也。

見かへれば、我が影の  
——憎さげに——か黒う落ちしほとり、  
きりくそ死骸とありて、  
弛に延べ擴げし脚の、

あゝ、強く心をむしる。

のどかなる秋の日和の  
やわらかう包める中に、  
堪へがたき胸の亂れは  
ものおどに、そゝられながら、  
いと緩く繞る日怒る。

### かゝる刹那も

いと薄き夕日のひかり  
柵の書に淡うかゝれり。

あゝ、かゝる刹那も、  
世は、人は、はしたなき  
愛憎、さては、誦詐、  
暴慢のほむらの  
執拗くも髓を捲くらめ。

秋のくれ、  
たゞ薄黒き  
うつろなる胸のいづみか、

かなた——世の悪熱を、  
遙けくも、そゞろ思ひぬ。

## 栗の木蔭

黒き林、白き山、青き空、  
また、枯れし柴垣、草葺の屋根、  
和やかな日ざしに雀ひた啼き、  
霜月の末、いと安らげに  
北國の都市は、まごろめり。

枯葉踏みて、栗の木蔭をさまよへば、  
氣も、うとくくと、いつしかに、夢みる如  
く、

遠き京の  
いづみと解かぬ町はづれて、  
鄙びしわたり、とある社の前庭に、  
石彫獅子の捲髪、さては、開きし口、  
いと湿めやかなの松の落ち葉を背に頸に  
蹲りぬる姿ぞ仄に浮びたる。

あゝ、更に、静けき此の心地もて、

より多く、果てし有らなく、我れをして、  
有りし事ども、無き事どもを夢みしめよ。  
霜月の末、いと安らげに  
北國の都市はまごろめり。

### 春の姿は閃めきて

北に向ふ斷層を傳ふて、  
上へ、下へ、這ひ纏はれる木の根、また、  
枯れたる蔓の交錯よ。

薄日受くる片側の斜面には  
黄ばみたる若笹の繁み、  
その縁に消え残る白雪の想像的の奇形。  
その上に、三桁ばかりの電線架は  
事も無げに、小都市の鈍き静けさに眠る。

教會堂の、削り落せる屋根のスレートは  
雨に浮きし水の碎片滑らし、  
杉の影黒くもらめく川波は油の如く膨る。

緑葉の氣息づきも悠暢に、  
四邊には滴れ續く雪解の雫の音、

あゝ、今、春の姿は閃めきて、  
いづみにか佇めり。  
我が眼よ、我が官能よ、  
疲れ潰るゝまで、  
その軽く巧みに、逃げ隠れ、消え失せる影  
を追ひ捕へよ。

## こんふ日

金持の裏庭には

若い衆の元氣な謠が溢れ、  
向ふ長屋の板戸の裂けた入口には  
主人が死ぬ所だと云ふて、  
窶れた人たちが騒ぎながら混雑する。

その前を、號外の鈴が轟いて飛んで行く。  
隣り國の宰相が暗殺された報知。  
大雪がモッリ〜と降りしきる。  
年の暮で、人々が忙しげに行き違ふ。  
ふと、峽間の温泉場で、  
いつぞや、大洪水の有つた時、

土色の大瀧が、引き嗣ぎく、幾枚の疊を  
吸ひ込んだ光景を思ひ出した。

胸の中は幾百本の棒片が荒れまわるやうだ。  
あゝ、ふんな日。

### 『時』は路傍に睡り

戸の割れ目傳ふて滑る雫、  
また、階下の坪に聞ゆる玉垂の音、

ゴム色の雲を、や、透く日の光り、

今、「時」は路傍に睡り、

あたゝかく夢みる如し。

緑葉は微笑み、

水は和らぎ、

枯れし木の梢にも

暢やかな心の往來をそるらし。

孤兒園の垣根にも

氷は油の如く溶け、

墓場には

鳩降りて群れ遊ぶ。



少女等よ、愛せ！  
男子等よ、働け！  
春は、ものかげに忍び寄れり。

## 北國の町

いと淡き、明るき、青き空、  
網に似る枯れし梢のかげに  
樺色の圓き雲かよひて北を歩めり。

晩秋の早朝<sup>まだき</sup>、

北國の町は、薄黒く、  
澄める氣の底に低く這ひ、  
無人の如き閑寂に  
南天の紅き實、

また、薔薇の蕾、皺まりて頸垂れたり。

灰色の銀杏の幹、  
黒く、節くれ立てる梨子の樹、  
煤ぼけて、唯一もど、そゝり立つ煉瓦の煙  
突よ。

あはれ、富者の幾棟の土藏の軒に鳴きよほ  
そ雀の聲も無く。

## 雪の國

白き屋根、白き空、

白き月、

白き光、流れさそらひ、

ものかげに、音を包み咽び潜む。

白き地の片ほどり、

愁ひ這ふ、いと薄き灰色の

疎らなる枝の影、

北國の十一月逝く夜半、

白き風靜かに渡る。

雪の國、

人は眠りて、

薄赤き電燈よ、

片側の電柱よ、

白き道真直に。

白く明るき晝よ

あゝ、只管ひたに物欲の燃ゆる日。

軽やげに雪片は舞ひつゝ降り、  
雪積みし松は緑に、幹あかく、自満して立  
てり。

いづみにか、鳥の喉を輓まろぶ聲音、

——勝てる者の爲に、敗れし者を嘲む小唄

！我が胸は躍る。

さらゝゝと、樂しげに舞ふ雪、  
降りつめる雪に、白く明るき晝よ。

あゝ、ひたに物欲の燃ゆる日。

まどろめる晝の野口

寺鄰り、櫳の生垣

絶え續き繞る芝原、  
霜枯れし並木櫻に  
添ふ溝の落ちたる水に  
佗しげの番ひの家鴨。

木魚の音靜かに漏る、  
佛堂の背の白壁に  
秋の日は麗らに満ちて、  
葉の落ちし百日紅の  
枝影の奇形に這へる。  
苔蒸せる墓域の隅に、

山茶花のしどろに散りて、  
常盤木の暗き林に  
竹の葉の微摺る音よ、  
まどろめる晝の野口の  
かそかかる躰の如く。

あゝ、星よ

あゝ、星よ、  
深夜の星よ、なごて斯は

夜おと、我が心をし引く。

神のまを宮居とも、

霊いふふ殿ごしも思はねど、

あな、その光り、

いと深う、青く冴えたる、

厳しき、冷たき、ちさき煌めきよ。

真夜半、身も世もなべて消えて、

汝仰ぎつゝ、いつしかも

立ちてゐる在れ、石の如、

唇堅う結ぼりて。

あゝ、その刹那、

冷たき涙只管にはふれ、

限り有る身の、うら悲しう、

限り無き「時」と「所」をまよひ行くかな。

## 虫

よ

刻々ど、いや迫り来る死も何か、

あゝ、ひたに旺んに歌ふ虫の聲も、

小夜ふけて、野草白冴え、

露霜の葉うらに滴したむ頃をし、  
低う戦き、杜絶え微かすれみそ爲れ。

歡樂と耽溺と——唯美の汝かれが  
半歳の短き生にしも、

あゝ、何者の壓迫？

此の衰慘の終り伴ふや。

虫よ、悲しいかを、汝に毒酒無く、  
ピストル、さては、七首も無し。  
されど、あゝ、如何してか、われど身を殺  
すとも、

歡樂をして、虫よ、つひの勝利たらしめ  
よ！

いづこぞ？

野の涯を雲は落ち行く。  
夕靄は丘を圍みぬ。  
見かへれば人の町は  
燈火のあちらみちら。

鐘鳴る、鐘鳴る。

あゝ、高き星の光りよ。

そよ風は林を渡る。

我が行く方はいづみぞ？

## 露の丘

草徑を日の光うらゝに流れ、

木立の影の黒波の長う縁取る朝の野を、

眼も眩らにぞ、頸垂れてみそ歩み行け。

雑色搦み絡れてぞ

膝に陽炎ふ、花咲く丘に攀ちぬれば、

冴なる鳥の歌聲も

いつしか灰に、雲を距てし泉の音を聞く如

く、深き霞に泳ぐに似たる眼や胸や、

さらめく露の光りへと

溶け沈み行く心地して、

高き軟らの草間に

臥してみそ在れ、象無き

象のもづれ夢みつゝ。

亞鉛の塀

かの古き瓦の屋根の上に、  
雲がくれ、朝日の光り潰れて、  
しろがねの輝き鈍く、  
ざらくと、樽り淀める。

灰色に空壓し垂れて、  
そよ揺れもせぬ朽葉木立に  
水霜の溶け濕めるほどり、

紫苑の花の頂洞み細りて、  
純白の飼鳩低う飛び交ふ。

あゝ、青白き、松蔭の  
亞鉛の塀の波状に  
のた打つ面よ、鳶錆びて、  
いと這ひ悩み、水に映れる。

收穫の板倉わたり



黄の葉、赤き葉、堆に散り、布き積む木の  
根廣場の一隅よ。

今、延び繁る芝垣の黒きが蔭に  
雲厚く被ざし夕の日は落ちて、  
たそがれの靄流れ來る間を風小休み、  
櫓の端ぞ唯獨り、さゝ音も無う顛へたる。

收穫の板倉わたり枯草の香を嗅ぎて、  
さらめき初むる遠星を望むとし無う、  
佇めば、重き吐息の紛れ出でよ、  
わがものと判ちも付かぬ憂愁ぞ胸を迷ふ。

あゝ、藁屋根の深う垂れたる壁のべに、  
いと静かにも素直なる内氣の「冬」は忍び寄  
り、  
もの煮る香ひ仄立つ高窓也  
赤き焚火の豊かある圍爐裏の縁を覗き見て、  
懐かしげにも微笑める。

あゝ、わが胸よ、  
冬は平和の、  
しみたくと生の休らひ、  
静かなる情ぞ汲む可き。  
たそがれの愁ひよ、しばし、

まごろみて在れ。

### 垂氷の格子

鳥が飢えてギヤア／＼喚く。  
空が雪曇りに掻き昏れて、  
窓には垂氷の格子が鎖して在る。

我等は幾日か太陽を見ない。  
世界は白と灰色と黒と青とだ。

茅葺の深い軒が眠り續けて居る。

我等の心も凍えて動かない。  
炭火の赤いのに僅かに浮き立ち、  
それが白い灰に化した時暗く沈む。

どみかで機を織る音がそる。  
又ノシ、と雪が降つて來た。

### 鐵色の會社の前

雪の上に雀の足形、また、小供等の遊んだ  
櫓の跡、

生徒等の走つたスケートの線も眞直に、ま  
た、弧形に。

乗り捨てられた呉服屋の箱自転車に  
正午近い日が薄く落ちて居る。

五六寸も積もつた新しい雪に両側を取られ  
て、眞中に一間ばかり路の付いた廣い小路、  
彼方の角にポストがしよんぼりと、  
その側に枯れた柳が飢じそうに。

シンとした土藏作りの鐵色の會社の前を  
色氣も無い若い女が腰上げの有るコートで  
もくしやくと歩いて行く。  
唯それだけ。上にも下にも人の影が無い。

### 此の心臓を贈らん

けふも又雪ふり、  
黒き葉は空に慄ふ。

舟無き港、

人無き島、

そゝにゐる、かゝる日は適<sup>あて</sup>へれ。

けふも又ふぶきし、

地は白き狂潮の底に戦く。

千馬斃るゝ陣地、

万兵碎くる戦野、

そゝにゐる、かゝる日は適<sup>あて</sup>へれ。

天意何ぞ。

我をして神たらしめば

此の几庸の人間<sup>ひと</sup>の國、

冬を飾るに、此の壯榮を許さんや。

アイヌ、また、エスキモーよ、

かゝる日は、當に汝等がもの。

熊に跨つて、襲ひ來たれ。

その毒の鏃<sup>やじり</sup>に、

我れぞ先づ、此の心臓を贈らん。

日光と青葉と

麗らかなの日の光りと  
常青とみき簇葉むらばと  
みの世にし在る限りは  
わが心笑みて在るべし。

麗らかなの日ざしよそ  
我が被服びふくにて、  
常青き簇葉よそ  
我が壁なれ。

麗らかなの日の光りは  
春と花とを産み、  
常青き簇葉は  
「榮え」と「強さ」に生く。

あゝ、わが愛づる日の光りと常青き葉とよ、  
あはれ、汝等きれらの齡と生命とは無窮なるかな。  
汝等見るに我が心臓こころときめき、  
歡びと詩うたとよそ湧き來ぬれ。

『若さ』こそ帝王なれ

霜どけの地しめりに、  
所狭く散り積もりたる枯葉朽ち行く一坪の  
日かげの苔地、家背の  
寒きが中に佇むも、  
不滅の境、永劫の  
榮えの華の厳しさを  
幻影にみそ立ち匂へれ。

「若さ」よ！

燃ゆる夢見人よ！

汝は常に「無限」を翔りて、  
そみに、又、かしみに、汝が住む可き  
新しき超絶の國を拓き行く。

「若さ」みそ帝王あれ。

あゝ、汝は眞生の府なり。

その雄威、いとも讃む可きかを。

太陽の如く

日おと、あゝ、斯くも旺んに、太陽は虚空  
渡り、

「時」は無限の全宇宙を超えて悠々の歩みを  
移す。

我等一樹の下蔭に佇む時も

ふれら絶大の相すがたに想ひ酔はざらんや。

數室の家、數坪の庭に起臥して、

一市町村に區々齷齪の生を競ふ衆庶よ、

五大洲を聯なり繞る大洋の濱に立たせども、

邈漠の雲霧の上に聳え立つ高嶽の頂に立た  
せども、

杳茫の涯は「無限」と相も融け行く廣原の裾  
に立たせども、

はた、太初あがらの地皮そのまゝに懷き保  
てる不可透の大森林に迫らせども、

同胞よ、われら人間ひとをして、太陽の如く、

「時」の如く、堂々として行き、悠々として  
進ましめよ。

華やかの日ざしの潮高浦ちて、  
微に燃えつゝ、屋根の海越えて漂ふ光の波  
のゆたゝと、  
黄金煌揺る穂頭を掠め、足搔きつ、潜りつ  
ゝ亂れ飛び交ふ百鳥の歌ふ千聲の勇ましく、  
涙に、朗らかに、高らかに、響きぞ渡る午前  
九時、  
八百町巷ごよもして、活動の潮を只管に、  
いや盛り、狂はひ駈くれ、渦捲きつ、躍り  
つ、吼えつ、関揚げつ。  
柱に凭りて、夢の如、

外界の騷擾聞き送る  
うつゝ無き身の胸底に  
微けき響傳へつゝ、  
獨り寂しう、万象を遠く離れて、静けくも、  
うなだれ、い行く、影薄き  
「時」の歩みを我は見つめぬ。

### 斜丘のひとととさき

黄芝生の斜丘の腹に、



膝抱きて、日和浴びつゝ、  
森かげの水車の音を  
聞き在れば、心も遠く。

つまさきに碌べる石を

幾ときか見つめしまゝに、

ふと思ひ、惑ひけり、

——生きて、かく此所に在れるを。

それと無う、心地せわしく、

——何所とし無き或所に

定まりて歸る可き身と、

うつらく思ひあせりつ、  
なほ石に見入りて在りぬ。

## 月は佇みて

圓葉柳まろばやなぎのかの岸に

今宵も月は佇みて、

倒れしまゝの、堤下さそしたの

舟番小屋を見おろせる。

ほの立ち迷ふ川霧の  
水下わたり烟遠く、  
胡栗林の下かげに  
村の端れは眠りたる。

ボヘミヤの草野

灰色よ、朧ろ夜よ、  
いづくまで、あゝ、いづくまで、  
我がおもひ、汝と擴おり、

汝と共に、涯し有らなく。

秋の夜よ、  
森越えて、山越えて、  
我れば今、汝に卷かれつゝ、  
ボヘミヤの草野を渡る、  
靄わけて、霧わけて、  
いづくまで、あゝ、いづくまで  
我がおもひ！

錆色の蔦

雨晴れて、風強き、  
輝やかの日ざしの早朝、  
粗壁の中ばに残る  
杉皮の蔽ひの上を  
蝕める朽ちし軒へと  
錆色の蔦ふそ這へれ、  
日に透きつ、風に揺らぎつ。  
——十月よ、なごて悲しき、  
北の國、あゝ、北の國！

秋晴れ

麗かう、日はやたに流れて、  
白花の静かに睡る  
叢株の茶の濃青葉に  
寂然と物みそ思へ、  
腹朱き南蠻蜻蛉。

秋晴れの眞晝前、  
機業場の背ろの空地、

おのづから足を止めて、  
百稜もくろくの頻る響を  
かつ聞きつ、かつ失ひつ、  
活動の世を嘲みけれ。

## 林の丘の黄昏

夢のやうに淡い幹々みきくの影の幾條いくまじかを  
枯葉のミツシリと散り布いた丘の斜面に  
一寸ちよつとの間、曳き染めた薄いく日光が

今、ペツカリと消えた。

あとは急に薄ら寒い黄昏となつて、  
そぐ下に見おろそ無縁塚が  
異様に暗い姿をして、  
端々はしから次第に溶け失せて行くやうに思へ  
る。

私は氣抜けのした心地で、  
譯も無く、唯ふらふらと  
徑みちも無い林の間なかを降りた。

麓は小廣い芝生の原である。  
私はもう一度、丈高い花崗の供養塔を見かへつた。

その時、ふいど、落葉を踏む  
静かな足音がして、

下の方から、一人の青年が  
色づやの無い顔をして登つて來た。

二人は顔を見合つて立つた。

孰<sup>ど</sup>らも唯ムツチリとしたきりである。

して、そのまゝ摺れ違つて通り過ぎた。

二三間來て、私は後<sup>あと</sup>を振り向いた。  
と、對<sup>むか</sup>者も足を停めて私を見て居た。  
が、矢張双方ともニコリとも爲ない。

私は又歩き出した。

して、何となく、此の世に唯一人の友を失  
ふたやうに感じた。

私は又振り返つて、結れた林の中を見あげ  
た。

もう彼の姿は何所にも見えない。

あたりは急に暗くあつた。

### 錯綜と紛亂！

枯れた林と、降る雪とを透して、  
はるか向ふに裸な堤が長く這ふて居る。  
何所か<sup>ど</sup>で、馬の鈴が微かに響いて直ぐ聞え  
なくなつた。

雪は綿のやうに大きくなつて、

眞白に肥つた林や堤が臙ろにチラつく。  
と、眼がクラ、として、唯白いものが瀧の  
やうに落ちる。

天も地も、どみかへ消え失せて、  
林も堤も何もかも皆な  
萬象は擧げて音も無く廻轉し初めた。

錯綜と紛亂！

アレ、何所かで木の枝の裂ける響がそる。  
眼が暗んで、眉のあたりがピクついて  
氣がモシヤクシヤと、次第に遠くなるやう

……あゝ、私等の國は何所へか撒き散  
らされて仕舞つた。

# 迷へる巡禮の詩集

終

明治三十四年一月廿五日印刷  
明治三十四年一月廿七日發行

定價送料共金拾五錢

著者兼 發行者	岩手縣盛岡市內加賀野三 細越省一
印刷人	岩手縣盛岡市內丸廿一番戶 堀内政業
印刷所	岩手縣盛岡市內丸廿一番戶 九 阜堂

發行所  
岩手縣盛岡市內加賀野三  
悠々書樓

